

## 能誉法師論

——和歌四天王の一人——

稲田利徳

「四天王」というのは、「四大天王」の略で、元來、仏教世界の中心に聳える須弥山の中腹の四方を居所とし、忉利天の主である帝釈天に仕えて、仏土を守護する、四人の外將を指す。即ち、東方の持国天王、南方の增長天王、西方の広目天王、北方の多聞天王の四人がそれである。

このことから、家臣や門弟の中で、武勇、才幹、技芸などに勝れた者四人を呼称することになった。例えば、「木曾殿の御内に四天王とまきこゆる今井・樋口・楯・祢井」（『平家物語』巻九）、「頼光朝臣遣四天王等」、令レ打ニ清監ニ之時」（『綱・公時・貞道・秀武』）、「古事談」巻二などは、木曾義仲や源頼光の家臣で、武勇の誉高い四人を四天王と呼称したもの。同様に歌壇においても、和歌四天王と称される歌人がいた。

二条良基の「九州問答」では、新古今時代の歌人として、「定家・家隆・有家・雅経、和哥ノ四天王ナド申サレケル」とみえ、近世の歌壇でも、蘆庵・澄月・蒿蹊・慈延を「平安四天王」、千蔭・春海・魚彦・宇万伎を「梶門四天王」、直好・幸文・斐雄・残夢を「桂門四天王」と呼称したという。

けれども、和歌史にあって、「和歌四天王」と称して、最も著名な

ものは、二条為世門の四人の歌人である。

ここで有吉保編『和歌文学辞典』（昭和五十七年刊、桜楓社）の「和歌四天王」の項をみると、次のように解説されている。

鎌倉最末期から南北朝初期頃の二条為世門下の優れた四人の法体歌人をいう。

『今川了俊歌学書』には、浄弁・頼阿・能与・兼好をあげ、それを承けた正徹物語は早世の能与（能誉として井蛙抄に挿話がある）に代わり浄弁の子慶運をあげる。（下略）

最近刊行の『和歌大辞典』（昭和六十一年、明治書院）でも、この記述とほぼ同じ主旨の解説がなされている。が、これら辞典類の記述は、実は、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 南北朝期』（昭和四十年刊、明治書院）における指摘に依拠したものである。

頼阿や兼好などが「和歌四天王」と称されていたことは、「正徹物語」に「徒然草」に触れた部分に、「兼好は随分の哥仙にて、頼阿・慶運・静弁・兼好とて其比四天王にて有りし也」とみえる（他にもう一箇所みえる）。従って従来、「和歌四天王」は、頼阿・慶運・浄弁・兼好の四名を指すとされてきた。

ところがその後、東山御文庫蔵本の「了俊歌学書」（仮題）が発見、紹介され、そこに了俊の口を通して、次の回想が綴られていた。

其世にも為世卿の門弟等の中には四天王とか云て、かれらが哥さまを、葉師寺、中条、千穂、秣山など、云し人々、如小師に信せしかども、故為秀卿の弟子に

成にき、其四天王は、淨弁、頓阿、能与、兼好等也、淨弁はうせにしかは、其子慶運、其子基運、頓阿これら皆為秀卿の弟子に成てはてにき、兼好、能与は早世して跡なく成しかども、存命の時は、兼好法師は為秀卿の家をばことの外に信じて、後撰集・拾遺集をも為秀卿の家本申出で、うつしなどせし事我等見及しぞかし、

これによると「四天王」は、淨弁・頓阿・能与・兼好ということになり、「正徹物語」のそれと齟齬をきたす。

井上宗雄氏は、これらの資料を勘案し、頓阿などの「和歌四天王」とは、宗匠一門を含めた、当時の歌壇全体の四人の如き称ではなく、二条為世門の四人の優れた歌人を指すこと、鎌倉最末期の歌壇情勢からみて、慶運は出生が遅く、まだ若いので、能誉（能与と同一人とみる）を四天王とする方が妥当であること、能誉は九州に下つて最も早く没したらしいので、父淨弁の引き立てなどもあり、南北朝初頭には、能誉に代わつて慶運が四天王に加えられたのであろうことなどの一連の見解を提起された。

これまで頓阿などの四天王を、当時の歌壇全体の四天王と漠然と考へる傾向があつたのに対し、「了俊歌学書」の「為世卿の門弟等の中には四天王とか云て」に着目し、為世門の四天王とみるべきことを指摘された井上氏の見解は適切である。考えてみれば、四天王と名称するからには、冒頭にも触れたように、帝釈天に当る中心人物があつてしかるべきであり、それが師匠の為世ということになり、理にかなつている。

ただし、この「和歌四天王」の問題に関しては、その後、杉浦清志氏が「和歌四天王についての一考察」なる論考を公表され、「了俊歌学書」の記述が曖昧であること、了俊に四天王のことを伝承したのは、薬師寺、中条、千穂、秋山らではなかつたか、正徹に四天王のことを伝えたのは、了俊の可能性があることなどを推測、さらに、了俊が四天王の中に慶運でなく能誉を入れた意図などについて言及されてい

る。

確かに、為世門の四天王ということが、当時、為世派一門の歌人達の間で、共通認識として定着していたのかどうかも判然としないし、「了俊歌学書」の記述の仕方にも、能誉が一番早く死没したので、その代わりに慶運が加えられたという文脈には、必ずしもなっていない。

これらの諸問題の詳細は、先の杉浦氏の論考によられたく、ここでは、「和歌四天王」の研究の一環として、了俊が為世門の四天王であつたと明言している、能誉の伝記と歌風に触れてみたい。

## 二

まず能誉の事蹟を辿つてみたいが、為世門の和歌四天王と称されているわりには、記録類、歌学書類、あるいは他の歌人の家集の詞書などに、ほとんど姿を現さず、詳細は不明で曖昧模糊としている。わずかに手掛りになるのは、先に引用した「了俊歌学書」と、頓阿の「井蛙抄」にある回想程度である。

従前、能誉に触れたものは、井上氏の『中世歌壇史の研究 南北朝期』が唯一のものといつてよく、現存するわずかな資料を読み解き、適確に事蹟を記述されている（以下、井上氏の説は、すべて、同書のもの）。その成果を踏まえて、『和歌大辞典』（昭和六十一年刊、明治書院）には、能誉の項目が次のように記述されている（執筆者は荒木尚氏）。

能誉（鎌倉期歌人）能与とも。生没年未詳。為世が最も注目した法体歌人で（井蛙抄）、その門の和歌四天王の一人に数えられる（ただしのちに慶運が代わつて加えられる）が、伝は明らかでない。二条家の歌会などにも出入りせず、自由高雅な隠遁生活を送つたらしい。晩年頃九州に下向した。その伝わる歌は極めて少なく、続千載集以下の勅撰集（ただしすでに新後撰に隱名入集）に九首入集。続現葉集・臨永集にも採られている。

この解説に多くを追加できる事蹟はあまりないが、「井蛙抄」などの吟味を通して、いま一度、能誉の輪郭を描いてみたい。

さて、「井蛙抄」巻六の雑談には、頓阿の回想形式で能誉の和歌と人物評を綴った箇所がある。その話の直前には、為世が「続千載集」を撰集する際、逢う人ごとに詠草の提出を求めていたが、これは為世の「勅撰をうけたまはりて、ひろくよき歌をもとめむとき、名誉なき人もいかなる秀逸をか詠じてもちたらん。などかあひふれであるべき」という信条によるものだという逸話が語られている。その話を受けて能誉の回想が綴られているわけだが、この部分は大きく二つに分けうる。前半は、能誉が「新後撰集」に隠名で入集したこと、後半は、頓阿が東山雙林寺に住んでいた頃、能誉の訪問を受けたことである。

従ってここでは、前半と後半に分離して内容を検討する方が理解しやすいとみて、二つに分けてみた。その際、引用本文は、『日本歌学大系 第五巻』所収の「井蛙抄」による。

「井蛙抄」の巻六の該当部分は、伝本によっては収載されていないものもかなりあるが、この部分は後に追加されたものでなく、本来あったものと思う。そこでこの部分を有する、書陵部本「井蛙抄」(一五五一—一四九)(略号一書)、久松潜一氏本「井蛙抄」(久)、国文学研究資料館本「井蛙抄」(タ二一八)(国)の三本をもって、主たる校異を加えて引用しておく。

能誉は能久云、故宗匠は能久の被<sub>レ</sub>執し歌よみなり。故香隆寺は能久・僧正は能久の愛弟の児なり。

侘人の心にならへ時鳥うきにぞやすくねはなかれける。  
とよめる歌は新後撰は能久に隠名にて入たり。後二条院、新後撰歌は御手づから屏風は能久・色紙にあそばされたるにも、此歌をいれられたるとぞ承りし。故宗匠これが歌とおぼえて人にかたられき。

あふ坂やつひにとまらぬ月かげを関のとあけてにしに見る哉  
さとの犬の声するかたをしるべにてとがむる人にやどやからまし  
などいへる歌也。是はさして庶幾せらるせらるべき体とも覚え侍らぬに、いかなる事にかとおぼつかなし。

諸本校異のうち、「能誉云」では以下の続柄からみて不審。ここは校

合三本のように「能誉は」とあるべきところ(このことは井上氏も指摘)。また、「新後撰歌は」も校合三本のように「を」とある方が妥当な本文。他の異同箇所も三本がそろって異文のところは、その本文がよいといえよう。

頓阿が能誉の思い出をここで記したのは、「井蛙抄」の一連の雑談の流れのなかでみると、その直前に、先に触れたように、為世の撰集姿勢——名誉のある専門歌人に限定せず、広く、優れた歌を求めていたことと関連するのではなからうか。即ち、為世の選んだ「新後撰集」に能誉の歌が隠名で一首入集したのは、「名誉なき人もいかなる秀逸をか詠じてもちたらん」という、師為世の信条とその実践の一例として語られているとみるのである。この流れをおさえておけば、「新後撰集」撰集の頃、能誉は歌壇において、「名誉」ある歌人ではなかったこと、それだけ「侘人の」の歌が秀逸であったこと、けれども為世が能誉の歌として記憶して人に語った二首の歌に対しては、「是はさして庶幾せらるべき体」の歌ではないと、頓阿があまり高く評価していなかったといった文脈の流れが、すつきり読みとれる。

この頓阿の回想で、伝記的にみて重要なことは、能誉が「故香隆寺(の)僧正の愛弟の児」であったとの指示である。「香隆寺」は、仁和寺院家の一つだが、この僧正のことは「仁和寺諸院家記」にみえる、香隆寺の項の「前大僧正守誉」が該当人物だろう。「仁和寺諸院家記」には、

號二大納言□□。大納言集藤卿息。頓誉僧正入室灌頂資。道俊僧正重受資。高雄御室御付法重受。佛名院。又成菩提院等管領。

と記述し、「文永七年正月十三日叙二法眼」から始め、以下に僧歴を詳細に記し、最後を「嘉元二年九月十九日入滅六平」と死没年時と享年で締めくくる。これによると守誉の生年は、建長元年(一二四九)となる。

守誉は、「新後撰集」に三首入集したほか、「玉葉集」一首、「続千

載集」二首、「風雅集」一首、「新千載集」一首、あわせて八首も入集した勅撰歌人でもある。「勅撰作者部類」は「仁和寺成菩提院大僧正、大納言実藤子」とするが、確かに「尊卑分脈」でも、実藤の子十人のうちの六番目に「守誉」の名がみえる。

能誉がこの守誉の「愛弟の児」であったとはどういうことか。「児(ちご)」とは寺院に召し使われる少年で、僧侶の男色の対象として存在するケースも多かった。男色のことはさておき、能誉は、守誉から非常に慈愛をもって目をかけられた弟子であったことは確かであろう。因みに、能誉の「誉」は、「守誉」から与えられたものではなからうか。「了俊歌学書」で「能与」とするのは、音読が通ずることに起因する誤写や宛字などによるもので、別途に「能与」とも称したのではなからう。やはり「能誉」が正しく、勅撰集でもすべて「能誉法師」とする。

恐らく能誉は、若年の頃から仁和寺の香隆寺に入門し、守誉から愛護を受けるとともに、和歌の指導も受けたであろう。守誉の歌が、為世の撰した「新後撰集」に三首も入集しているのは、守誉と為世との間に交誼のあったことを推測させる。そんな関係もあって能誉と為世の師弟関係も生じたのではなからうか。能誉は、後述するように、二条家の歌会に参加しなかったことを述懐しているが(「井蛙抄」、この事實は、仁和寺関係の歌壇のなかで、為世に接して指導を受けていたことをも暗示する)。

能誉にとって、師守誉の死去は、以上の状況からみても、大へんなショックであり、彼のその後の人生に不安な翳りをもたらした。

「続後拾遺集」<sup>註</sup>には、能誉の師に対する哀傷歌が撰入されている。

前大僧正守誉身まかりて後よめる

草の陰なほこそたのめ露の身の置き所なくなるにつけても(哀傷・二一五四)  
我が身を「露の身」に比喩し、師を失って置き所もなく、なおも「草の陰」(守誉の墓)を頼みにするという、茫然自失のさまが抒情され

ている。師への哀傷歌は、同様に「続現葉集」<sup>註</sup>にもみえる。

前大僧正守誉身まかりける比、人のとぶらひ侍りければよめる

夢とのみなほもうたがふわかれちをうつつに人のとふぞかなしき

(哀傷・六六四)

守誉の死に直面し、「草の陰」を「なほこそたのめ」と詠じ、「夢とのみなほもうたがふ」とする表現は、決して誇張ではなく、素直な能誉の心情の流露であったらう。能誉が後年、九州に下向する精神的な素地は、嘉元二年九月、信頼していた師に先立たれたときに兆していたのではなからうか。

さて、「新後撰集」に「よみ人しらず」と匿名入集した、

わび人の心にならへほととぎすうきにぞやすくねはななけれける

(雑上・二二七二)

の歌は、撰者為世に秀歌と認定されただけでなく、後二条院が、「新後撰集」の幾首かの歌を、屏風の色紙に書かれたときにも選ばれたという。この後二条院の色紙執筆時は、「新後撰集」成立の嘉元元年(一一三〇三)から院の死去された徳治三年(一一三〇八)の間の数年間のことだが、より撰集成立に近い頃と思う。

この歌は、郭公に早く鳴いてくれることを下知する構図をとるが、それを「わび人の心にならへ」と発想したところが新味がある。「わび人」といえば、「わび人の涙の玉の」(古今集・八四一)、「わび人の袖の涙の」(新古今集・四六一)のように、憂く辛い境遇にあって、すぐ涙をこぼして泣く人としてのイメージが定着している。即ち下句の、「うきにぞやすくねはななけれける」が「わび人」の本意である。しかもこの歌の「わび人」は、作者自身の投影でもあり、郭公に向かつて、憂く辛いことであってすぐ声をあげて泣いている「わび人」の心情にならって鳴いて欲しいという発想には、郭公の声に接して、自己の孤独で悲哀な心を慰撫したいという、しんみりした情感も溢れている。この歌が勅撰集に入集したゆえんである。

ここで、為世の撰になる「新後撰集」「続千載集」の二つの勅撰集、それに為世撰かとされる私撰集「続現葉集」での、慶運を加えた五人の入集歌数を表示してみると次のようになる。

撰集名	作者				
	能誉	浄弁	頼阿	兼好	慶運
新後撰集	1	0	0	0	0
続千載集	2	1	1	0	0
続現葉集	4	2	2	3	1

この表でみても、為世は能誉の力量を一番評価しており、「井蛙抄」の「故宗匠の被レ執歌よみなり」の言を裏付けている。

井上氏は、「何の根拠もない臆測を行なえば、新後撰成立の嘉元頃三十歳には満たなかったのではあるまいか」と臆測された。また、他の四天王の生年は、浄弁が一二五六年(康元)頃、兼好が一二八三年(弘安六)頃、頼阿は一二八九年(正応二)、慶運は一二九六年(永仁四)頃であることも勘案し、「能誉は一二六〇〜八〇年(文永〜弘安)頃の生まれである事が推測されるとの意見も提起されている。もっとも、「新後撰集」の成立時(一二三〇〜三)に三十歳に満たないとすれば、生年は一二七〇代以降になるのだが。

私は、「新後撰集」成立の嘉元元年には、少なくとも二十歳は越えていたと思うし、守誉が死去した嘉元二年には、人々の弔問に対し、それ相応の和歌を応答していること、後述のように、九州へ下向するとき、「上洛の命もしらぬ程」と、かなりの年齢である口吻からみて、嘉元一二年頃には、三十歳前後に達していたのではないかと臆測している。これによると生年は一二七〇年前後となる。浄弁よりは年下、兼好、頼阿よりは年上といったところか。確かな根拠のない蓋然的な意見だが、一応提起しておきたい。

なお、為世が、能誉の歌として記憶し、人々に吹聴していた二首の

ことは、後の歌風のところで分析する。

### 三

次に「井蛙抄」の後半部分を引用し、若干の検討を加えてみる(「日本歌学大系」には、会話の指定はないが、内容を理解しやすくするため、私意に、能誉の会話を括弧でくくってみる)。

東山雙林寺にすみし比尋来りて、「年月承及乍ら、未レ得<sup>ナシ</sup>參會<sup>シ</sup>之次日近程に筑紫へ被<sup>レ</sup>下べし。又上洛の命もしらぬ程に、うひく<sup>ナシ</sup>しながら、尋来たる」など申き。此道の事も如法卑下しかへりたり。「さして稽古仕たる事もなし。

詠歌も生得に其骨なきよしを存じ侍るを、宗匠あしからぬ由を被<sup>レ</sup>仰事我ながら心得侍らず。此世ひとつならぬ宿執にて侍やらんなどまでおぼゆると申き。しばし雑談して侍しが、物などいたく見たる物とは覚えず。世に申<sup>ナシ</sup>やさしき数番者と覚え侍りき。

校異のうち、「世に申」のところは、「申」のない、書・久本に従い、「世に」を副詞(「いかにも」、「まさしく」の意)にとる方が妥当かもしれない。(なお、国本は「世に申」がない)。

ここには、一日、雙林寺の草庵を訪れた能誉の人物像が、頼阿の目を通して鮮やかに回想されていて興味をそそられる。

能誉の発言内容の主旨はおよそ次のようなことであった。即ち、為世門の弟子として、頼阿のことを以前から耳にしていたが、自分の方が歌会に参加することもなく、これまで面識がなかったこと、近日、自分は筑紫へ下向することになったが、再び帰洛できる余命もあるかどうかかわからないので、気恥しながらも頼阿を訪問したこと、自分は歌道において、さしたる修練を積むこともなく、才能もないと思っっているが、師が為世が褒めてくれるにつけ、前世からの因縁か、歌道にかがずらわっていること。

これに対して頼阿は、しばらく雑談したときの、能誉の印象を、非常に歌才を卑下したこと、歌書類を博覧した歌学者ではなく、むしろ、

「やさしき数寄者」のように思われるとした。

ところで、能誉が頼阿を訪問し、九州に下向した時期はいつのことか。すでに考証したように、頼阿が東山に居住していたのは、文保二年（一一三一）八月頃までと推測される。さらに、能誉はこの時、元年（一一三二）八月頃までと推測される。また、能誉はこの時、「又上洛の命もしらぬ程」と、かなりの齢を重ねていた口吻が感ぜられるので、できるだけ元弘元年に近い頃の方が妥当であろう。同じ四天王の一人浄弁も、やはり九州に下向しているが、この方は嘉暦（一一三二—一一三三）の末頃とみなしてよい。

この当時、筑紫には、鎮西探題府を中心に北九州歌壇とも称すべきものが形成されていたことは、川添昭二氏や井上氏に論がある。川添氏は「浄弁の九州下向は、北条英時、大友貞宗らが、三代集の伝受、和歌指導等のために招いたのかもしれない」とされ、また、能誉の九州下向は、その目的も理由も、下向後の状況も一切わからないが、

和歌数寄者の懇請によるのかもしれないし、仁和寺系の寺院や庄園を縁として下ったのかもしれない。いずれにせよ、能誉の九州下向は九州数寄者の文芸愛好と無関係であったとは思われない。九州における二条系歌風の伝播に一役買ったことと思われる。

との推測を述べられたが、井上氏も、能誉は浄弁と同様、「或は鎮西探題府か、島津・大友・少弐というような豪族の数寄者から招かれたものではなからうか」、「恐らく能誉と浄弁は九州で逢ったに違いないし、或は浄弁の下向は能誉が関与したのかもしれない。そして浄弁は英時と貞宗に三代集を相伝するのである」と同じ推測を提示されている。

恐らく能誉と浄弁の九州下向の目的には共通するものがあつたのであろう。そして多分、能誉の方が少し先に下向したのではなからうか。仮にその時期を嘉暦初年頃とみると、先の能誉の年齢推定によると、五十歳前後となる。五十歳前後は、当時あつては、「又上洛の命も

しらぬ程」といつても不自然ではない。

能誉の九州での事蹟は全く不明であるが、再び都へ帰ってくるのがあつたのだろうか。康永三年（一一三四）足利直義の勸進した「金剛三昧院奉納和歌」に、浄弁・頼阿・兼好・慶運の四天王は短冊作者として顔をみせているのに、能誉の参加はない。能誉はこの時、都にいなかったか、あるいはすでに死没していたのではなからうか。また同じ頃成立した「藤葉集」にも、他の四天王は入集しているのに能誉の歌は一首も入集していない。これは、井上氏も言われたように、資料の乏しかったためかもしれないが、物故者とみなして軽く扱った可能性がある。

良基の「近來風体抄」には、貞和の頃に為定家の句歌会での、頼阿・慶運・兼好の活躍ぶりが記されているが、能誉の姿はそこにもみえない。どうやら能誉は、自身不安な予測をしたように、九州に下向して再び帰洛することもなく客死した気配がある。ただ、浄弁が撰歌に関与したかという、元徳三年（一一三三）頃成立の「臨永集」に六首、同じ頃成立の「松花集」に一首（現存範囲）入集しているので、この頃までは生存していたと思われる。

「了俊歌学書」の「兼好、能与は早世して、跡なく成しかども」からみると、師為世が八十九歳の高齢で死没した暦応元年（一一三三）以前、正慶年間（一一三三—一一三五）頃、まさに南北朝動乱の最中に亡くなったのではなからうか。先の推定年齢に従うと、五十五—六十歳頃ということになる。この年齢まで生きた人を「早世」というのは奇妙かもしれないが、「早世」は若く死去したというより、他の四天王との比較で早く世を去った意であろう。「早世」とされた兼好とても、七十歳以上生きた可能性があり、浄弁は九十歳前後、頼阿は八十五歳、了俊自身もこの時、八十五歳といずれも長寿ばかりである。その点からみて能誉は「早世」なのであろう。

四

能譽の伝記とかかわる、もう一つの重要な資料である「了俊歌学書」(仮題)は、すでにその一端を引用したが、ここで改めて、その前後も含めて、少し長く引用し、この曖昧で意味の通りにくい文意の、私なりの読みを示しておきたい。

為世卿、門弟のむかし人にもをしへ申しは、和歌はやさしきより外のすがた有へからず、こと葉は三代集の哥の詞の外不可詠と云々、然間かの門弟ともがら其比よめりし歌どもは、たとへは木にて人形を作て、それになき人の昔差たりし衣どもの日なれたるが、面も裏も見わかず、きれく成たるを、木作の人形の差たるごとくなるへし、

其世にも為世卿の門弟等の中には四天王とか云て、かれらが哥さまを、薬師寺、中条、千穂、焯山など、云し人々、如小師に信せしかども、故為秀卿の弟子に成にき、其四天王は、淨弁、頓阿、能与、兼好等也、<sup>(1)</sup>淨弁はうせにしかは、其子慶運、其子基運、頓阿これら皆為秀卿の弟子に成てはてにき、<sup>(2)</sup>兼好、能与は早世して跡なく成しかども、存命の時は、兼好法師は為秀卿の家をばことの外に信じて、後撰集、拾遺集をも為秀卿の家本申出で、うつしなどせし事我等見及しぞかし、<sup>(3)</sup>かれら申しは、古今の説の事は昔為氏卿・為世卿三代の時、為相卿と問答に一天下の隠なく成て侍しかは、今更一条家を不可改さりながら今此御門弟に参て直に説をうけ給に、かの説はあさまに成て侍とぞ、此法師等は申侍し、(濁点は、原本の朱注のまま)

この言説は、了俊が「和歌所への不審条々」「落書露頭」などで一貫して主張してきた、二条派批判、冷泉派擁護の文脈のなかに位置付けて理解すべきものである。内容的には、私に改行した所で前後に分けて理解するのがわかりやすい。前半は、為世の門弟たちの歌に対する批判で、彼らの歌を故人の古着を着せたような木作りの人形に比喻し、古くて生氣も魂もこもらない歌だと痛烈に非難する(なお、この文の「昔差たりし衣」「人形の差たる」の「差」は「着」の誤写ではないか)。

後半は、当時の武家歌人から、あたかも「如小師」に信頼された、為世門の四天王を紹介し、結局は彼らも最後的には冷泉為秀の門弟になり、二条家の歌学が浅薄なることを悟ったことを強調している。

この主旨のなかで、いささか曖昧な文脈の意味を読み解いてみると、傍線(1)は、この四天王のうち、淨弁は早く没したので、直接為秀の弟子にはならなかったが、その子の慶運、そのまた子の基運、それに頓阿らは最後の皆為秀の弟子になってしまった意と解する(傍線部は、了俊の意を補ってみたもの)。また傍線(2)は、四天王のうち、兼好、能譽は早く世を去り、その弟子なども絶えたので、淨弁と同様、彼らやその弟子が直接為秀の弟子にはならなかったけれども、生きていた時には、兼好は為秀卿の家を信じ、為秀から勅撰集の家本を借りて書写していたのを見たこと、即ち為秀と関係を有したことを主張したと読む。傍線(3)の「昔為氏卿・為世卿三代の時」は不審な本文。この後を読んでゆくと「抄物どもの事、為氏・為世・為道三代まで名をだにしたられざりき」とあるので、ここも「為道」を誤脱しているのではないか。また「かれら」「此法師等」は、直前の兼好・能与を文脈的には受けるようだが、ここは二人に限定すべきではなく、兼好をも含め、為秀の弟子になった慶運・基運・頓阿らを指し、冷泉家の歌学に接した彼らが、異口同音に、二条家の歌学の浅薄さに気付いたといっていたことと解する。

従ってこの「了俊歌学書」では、四天王のうち、能譽が早く亡くなったので、その代りに慶運が入ったといったことには触れていない(結果的には、そのようになつたかもしれないが)。

なお、四天王を「如小師」に信じていたという、薬師寺・中条・千穂・秋山の四名とは、年代的にみて、井上氏の推定されたように、薬師寺公義、中条長秀・千穂高範、秋山光政とみなしてよからう。これらの人々は能与などの四天王と交誼があったというから、ごく簡単に歌歴などを紹介しておく。

薬師寺公義は、観応二年（一二三二）に出家して、元可法師と称し、家集に「元可法師集」も現存、かなり著名な歌人なので、ここで詳説する必要はないであろう。南北朝にあつても、「当時地下歌仙」（愚管記）永和三年十二月十五日の条と称されていた。高師直の家人で、例の「太平記」にみえる、兼好法師のラブレター事件に関与した人物。「新千載集」以下の勅撰集に六首入集する。

中条長秀も、「新千載集」二首、「新拾遺集」三首、「新後拾遺集」五首、あわせて十首入集の勅撰歌人。「勅撰作者部類」には、「五位中条兵庫頭、出羽守藤原景長男」とする。出家して、元威と称した。「統草庵集」には頼阿との交誼が窺え、「新玉津島社歌合」（貞治六年）、「熱田日本書紀紙背和歌」（永和元二年）などにも和歌がみえる。勅撰集入集歌の詞書から、為定家や足利尊氏方での歌会にも参加していることが跡付けられる。

千穂高範も、「風雅集」一首、「新拾遺集」一首、「新後拾遺集」二首、「新統古今集」三首入集の勅撰歌人。「勅撰作者部類」に「五位千秋三河守。五郎藤原範世男」と記す。尾道の「浄土寺法楽観音經三十三首」（延元元年）、「金剛三昧院奉納和歌」、「為世十三回忌和歌」（観応元年）などにも出詠。「園太曆」（貞和二年閏九月四日の条）には、百首和歌詠進に関して、足利尊氏の使者（千秋藏人高範）をしているように、尊氏側近の武士である。

秋山光政は早世したためか勅撰歌人ではない。秋山藏人と称し、源光助の子息。「統草庵集」には、光政の死をめぐって、父光助と頼阿との間に哀悼歌が贈答されている。「草庵集」「統草庵集」の詞書によると、頼阿は頻繁に光政のもとで詠歌している。「金剛三昧院奉納和歌」、「玄恵追悼詩歌」（観応元年）にも出詠、「藤葉集」にも一首入集する。

以上のように、これら四人の歌人は、足利幕府に関連した武家歌人とみなしてよい。

この四名らが、為世門の四天王を信頼して接触をもったことは了俊の証言であり、確かなことであろう。ただ、四天王のなかでは、歌会に参加することの少なかつた能管は、一番交誼の程度が弱かつたのではなからうか。

## 五

ここで能管の和歌の特色を論じてみたいが、現存するものは極めて稀少で、遺憾ながら、その一端に触れることしかできない。

能管の歌は、勅撰集には、「新後撰集」に一首匿名入集、「統千載集」二首、「統後拾遺集」二首、「新千載集」三首、「新拾遺集」一首、「新後拾遺集」一首、あわせて十首入集。私撰集には、「統現葉集」四首、「臨永集」六首（うち「新千載集」と一首重出）、「松花集」に一首、あわせて十一首入集。それに「井蛙抄」にある、為世が記憶していたというもの二首を加えると、二十二首（重出の一首を除く）、これが管見に入った、現存する能管の和歌のすべてである（現存和歌は、本稿の末尾に一括して集収しているので、その方を参照願いたい）。

南北朝・室町期の、多数の和歌を現存させている歌人に比較し、あまりにも寂々たる詠草である。これは、能管自身、まとまった家集編纂などを企図するような性格の歌人ではなかつたこと、さらに公的な歌会などに、あまり積極的に参加しなかつたことにも起因するだろう。まず最初に「井蛙抄」に引用されている、為世の記憶していた次の二首から吟味してみる。

- (1)あふ坂やつひにとまらぬ月かげを関のとあけてにしに見る哉
- (2)さとの犬の声するかたをしるべにてとがむる人にやどやからまし

この二首は為世が評価した能管の歌なので、それなりに印象に残る点はあるはずだが、頼阿は、「是はさして庶幾せらるべき体とも覚え侍らぬに、いかなる事にかとおぼつかなし」と、高く評価してない。確かに、印象鮮烈といった秀歌ではないが、(1)(2)の歌には、それぞ



れに奇抜な気転が込められており、それ相應の持味がある。

(1)は、月が東から出て西に隠れるまで、ずっと眺めていたこと。「逢坂」には関所があるのに、月はそこに止まらない。それを「つひにとまらぬ」としたところが一興。さらに「関の戸あけて」の「あけて」は、「戸」を開ける意と夜が明ける意を込めた、一種の掛詞になっているとみるべきだろう。そのことは、

相坂やせきの戸あくる鳥のねに木のまの月のかげはさしつる

(弘長百首・融覚・六〇六)

あふさかの関の戸あくるしのめに宮この空は月ぞのこれる

(玉葉集・旅歌・前參議能清・一一三九)

などの発想の類似した歌と比べてみても自ずから納得されよう。(1)の歌は、このように先蹤歌の発想や修辭を撰取しながら、逢坂の関にあって、東に出た月から明け方に西に隠れるまでの月を、一晚眺めつくしたという、月へのあこがれと風流心を余情に込めたところに興趣があるといえよう。

(2)は、旅にあって宿を探し求める不安な心情を詠じている。里の犬の声のする方向を道しるべにして行き、私に目をとめてくれる人の所に一夜の宿を懇願しようという主旨。発想の核は「古今集」の、

秋のの道もまだひぬ松虫のこゑする方にやどやからまし

(秋上・よみ人しらず・二〇二)

の歌に依拠するが、「源氏物語」(浮舟)で、匂宮が宇治に浮舟のもとを訪れる場面の「夜はいたく更けゆくに、この物咎めする犬の声」を背景にする。この場面は中世歌人に頻繁に取材されているが、その場合、例えば、

たれとなく人をとがむる里の犬のこゑすむほどに夜は更けにけり

(寂蓮法師集・二九八)

行ききれてやどとふすゑのさとの犬とがむるこゑをしるべにぞする

(風雅集・旅歌・和氣仲成・九一七)

のように、犬が人を「とがむ」ように詠むのが普通である。けれども能譽の歌は、その「とがむ」を、人の方に転換、いわゆる「とがむ」を「咎める」意でなく、「目をとめる」の意に用いるという気転が込められている。

以上のように、能譽の二首の歌は、それなりに趣向がこらされており、そのあたりが為世の印象に残ったのではなからうか。

現存する二十首(部立の明示のない、先の(1)(2)を除く)を、今仮に、四季・恋・雑の部立別にみると春一首、夏なし、秋三首、冬二首で、四季歌は六首、雑歌は六首、これに対して恋歌は実に八首もある。僧侶歌人にして、恋歌が一番多く入集しているのは、いささか奇妙な感じも受ける。これは能譽が恋歌が得意であったというよりも、偶然による、ある意味では皮肉な現象といえようか。

## 六

能譽の現存する和歌を瞥見して、まず印象に残るのは、二条派歌人らしく、かなり典型的な表現や発想を取り込んだものが多いということである。

(3)あくがるる心のままに尋ねきて山ぢのはてを花にみるかな

(統千載集・雑上・二六七)

(4)草の陰なほこそたのめ露の身の置き所なくなるにつけても

(統後拾遺集・哀傷・二四九)

(5)人しれぬみやまがくれのむもれ水したに心のゆくかたもなし

(臨永集・恋上・三六七)

(6)偽のあるをならひとたのみてやすくも人のちぎりおきけん

(臨永集・恋中・四四六)

(7)ふみわけしをかのかげ草かれがれにかよひたえたる水ぐきのあと

(臨永集・恋下・五二五)

これらの歌の傍線部などは、伝統的にみてかなり慣用的、類型的に使用されてきた表現である。(3)の「あくがるる心のままに」は類出する類型表現だが、「あくがるる」対象を花に絞ってみても、

あくがるる心のままに花を見ば春は山ぢやすみかならまし

(玉葉集・春下・式乾門院御匣・二〇五)

あくがるる心のままによしのやまをのへのはなをけふみつるかな

(江師集・四三五)

など、用例にことかかない。ただ、(3)の歌は、そういった類型的な発想、表現を撰取しながら下旬に「山ぢのはてを花にみるかな」と、花をどこまでも尋ねて行つた風流心を、曲折して表白したところに興趣がある。

(4)は先にも引用した。守誉の死を悼む歌だが、傍線部は、  
くさのはなびくもまたずつゆの身のおきどころなくなげくころかな

(金葉集・雜上・大神宮御詠・五八八)

浅茅原うらがれゆけば露の身のおきどころなく虫や鳴くらん

(延文百首・藤原道嗣・二三四九)

などと類型的な表現。ただ「露の身のおきどころなく」とくれば、引用例歌のように、身の置き場がなくて、悲しみ嘆くことを表出して締めくくられるのが普通だが、能誉の歌は、現世に他に露の身を置く葉がないので、「草の蔭」(師の墓場)の葉に置くのを頼みにすると転換し、師を失つた悲哀を余情として込める工夫がなされている。

(5)の傍線部の「みやまがくれのむれ水」も、  
かずならぬ山みがくれの埋水うきにはえこそもらさざりけれ

(統後拾遺集・恋一・藤原宗泰・六五〇)

などにみえ、「埋水」も、

入しれぬ木の葉の下のもれ水こほればいとど有りとしもなし

(延文百首・御製・六〇〇)

しらせばや木の葉がくれのむれ水したにながれてたえぬころを

など、内にこもつて人に知られない鬱積した恋心の表白に多く使用されるが、能誉の歌もその線に即している。

(6)の「偽のあるをならひと」は、

偽りのあるならひとや人ごとそむかれぬ世をうしといふらん

(草庵集・二二四一)

などはじめ、鎌倉末期から南北朝頃にかけての和歌に散見する常套表現。が、(6)の歌は、深い契りを交しながらも離れてゆく恋人の態度を、偽りのある世の「ならひ」を「たのみ」にすることかと、辛辣な皮肉をあげているところが奇抜である。

(7)は、「かれがれ」に「枯れ」「離れ」を掛ける。「をかのかげ草」は、「枯れ」「たえる」ことと関連してだされる。

初霜のをかのかけ草かりにのみかよひし跡はやがてかれにき

(弘長百首・融覚・五一七、新統古今集にも)

この為家の歌は、能誉の歌と発想、措辞ともに近似し、影響関係が想定できるかもしれない。

以上、能誉の歌に、類型的な表現の多いことを、数例をもつて示してみた。ただ、そのなかに、能誉なりに、一味、新しいものを盛り込んでいる。そこが、勅撰集や私撰集に選歌されたゆえんであろう。かかる詠歌態度は師為世の「和歌庭訓」(「心はあたらしきをもとむべき事」)の「花をしら雲にまがへ、このはを時雨にあやまつことは、もとよりかほのごとくにははらねども、さすがおのれくゝとある所あれば、作者の得分となるなり」といった主張と一派通うものである。次に歌枕を詠み込んだ歌を三首ほど取り上げてみる。

(8) たのめてもこぬみの浜のおきつ風なにいほさきの松に吹くらん

(新拾遺集・恋三・一一五六)

(9) うちなびくいりえの尾ばなかけみえて袖に浪こすまののうらかぜ

(統現葉集・秋上・二五九)

(10) しぐるともいはでの山の下もみちそめてぞ秋の色はみえける

(統現葉集・秋下・三九六)

(8) の「こぬみの浜」は所在不詳だが(一説に静岡県の薩埵峠の海)、早く「万葉集」に、

磐城山直越え来ませ磯崎の許奴美の浜にわれ立ち待たむ(巻十二・三一九五)と見え、「来ぬ身」と「待つ」との関連で詠まれてはいるが、それ以降はあまり取材されなかつた歌枕。二十一代集でも、俊頼の、

いほさきのこぬみのはまのうつせがひもにうづもれていくよへぬらん

(続後撰集・雑中・一一六一)

の一首のみ。俊頼には、あと一首、

いつとなくこぬみの浜の人まつとただよふなみのたえぬ日ぞなき

(永久百首・四八〇、散木奇歌集にも)

があり、「来ぬ身」と「待つ」をからめている。能譽の歌も、こぬみの浜の「いほさき」の風に向つて、あてにしているもやつても来ないのに、なぜに松(待つ)に吹くのかと詰問する。地名に掛けて知的に構えた歌である。

(9) の歌の「まの(真野)」は、俊頼の著名な秀歌、

うづらなくまののいりえのはまかせにをばななみよる秋のゆふぐれ

(金葉集・秋・三三九)

などの影響もあつて、よく取材された歌枕。能譽の歌もこの俊頼の影響下にあるが、薄を袖に見立て、俊頼の「をばななみよる」を受けて「袖に浪こす」としたところに趣向がある。その点では、

うちなびくいりえのをばなほのみえてゆふなみまがふまののうらかぜ

(秋篠月清集・一一七三)

の歌と措辞、発想が酷似するし、「袖に浪こす」の措辞も、あづまぢやかれののすすき風わけてそでになみこすうきしまがはら

(雲葉集・藤原業清・七八五)

の歌に、「薄」との関連が見出される。

(10) の「いはでやま」は、早くは「古今六帖」などに「いはで山いはでながらの」(八七六)と「言はで」と掛けて取り込まれている。能譽の歌も「言はで」と掛詞に用いているのは同じだが、「いはでの山の下もみち」の表現は、

我が恋はいはでの杜の下紅葉いつの人まに色にいださん

(正治初度百首・範光・一五八一)

中中にはでの山のしたもみちよのつねよりもふかきいろかな

(檜葉和歌集・寛円法師・五五九)

我が恋はいはでの山のしたもみちうへには色にいでぬなりけり

(安撰集・法印寛海・二三五)

などに見え、色に出ることと関連付け、類型化されている。能譽の歌も、その伝統的な発想に即しながら、秋が来たとき口に出して告げなくとも下紅葉の色でそれとわかると詠じる。

これらの名所歌枕の歌でも、伝統的、類型化された措辞を取り込みながら、ささやかな趣向をこらせて新味を出している。

さて現存する二十余首の和歌を味読してみても感ずることの一つは、「夢」と「うつつ(現)」とを対比する歌が散見すること、次の四首がある。

(11) 年月のつらさは夢になしはててこよひをながきうつつともがな

(新千載集・恋三・一一三三)

(12) ならばねば身にこそ夢とたどるともこれはうつつといふ人もがな

(新後拾遺集・恋三・一一二四)

(13) 夢とのみなほもうたがふわかれちをうつつに人のとふぞかなしき

(統現葉集・哀傷・六六四)

(14) 都人かよふゆめちやたどらんよなよなかはるくさのまくらに

(臨永集・雑下・七一五)

(11)(12)は共に、「逢恋」の本意を詠む。いずれも今宵の逢瀬を「夢」とみることを拒絶し、「うつつ」と確信したいと願っている。(12)の方は、

うつつとも後にやしらむまだなれぬこよひは夢とたどる心に

(新千載集・恋三・源信詮・一三九四)

などの歌と類似する。

(13)は守誉の死を悼む歌で、すでに引用したが、この歌は不幸に直面しているので、(11)(12)とは逆に、今を「夢」であつて欲しいと詠じる。

(14)は「ゆめ」だけで「うつつ」の語はないが、「よなよなかはる」草枕が「うつつ」として提示されている。この歌は「風雅集」の旅歌に連続して配列されている為兼の歌、

故郷にちぎりし人もねざめせばわが旅ねをもおもひやるらむ  
むすびすてよなよなかはる旅まくらかりねの夢の跡もはかなし

(九五七・九五八)

の二首を混合したところに発想の核を得たような歌になつていて興味深い。

「夢」と「うつつ」を対比した歌には、仏教的な見地から、現実を儚い「夢」とみなし、来世に望みをつなぐといった内容の歌も、歌僧である能誉であれば、あつてもよいが、その種のものはない。これも偶然のことかと思ふが、先の恋歌が多いこととあわせて、皮肉な結果といえようか。

能誉の歌で最後に付言しておくことがある。二条派の風体は、為世の祖父為家の歌風を、理想的な風体として庶幾する傾向がある。そのこともあつてか、わずかに現存する能誉の歌にも、為家の歌と発想、措辞が類似したものがある。これまで引用したものもあるが、ここで一括して明示しておく(前歌が能誉、後歌が為家の歌)。

しぐるともいはでの山のしもみちそめてぞ秋の色はみえける

(続現葉集・秋下・三九六)

くちなしのひとしほぞめのうす紅葉いはでのやまはさぞしぐれけん

(続古今集・秋下・五〇八)

ふみわけしをかのかげ草かれがれにかよひたえたる水ぐきのあと

(臨永集・恋下・五二五)

初霜のをかのかげ草かりにのみかよひし跡はやがてかれにき

(弘長百首・五一七)

あふ坂やつひにとまらぬ月かげを関のとあけてにしに見る哉

相坂やせきの戸あくる鳥のねに木のまの月のかげはさしつる

(弘長百首・六〇六)

これらの類似は偶然というより、能誉が為家の歌を念頭にしたことによつて生じたものであつた可能性もある。

以上、能誉の現存する、わずかな和歌を手がかりに、その歌風的一端に触れてみた。為世の愛弟子として、まずは二条派歌人の典型的な歌風を展開したとみなしてよからう。

鎌倉時代最末期に、二条為世門の四天王の一人と称された能誉の伝記と和歌の特色を辿ってきた。

彼の生涯には不透明な部分が多岐に多い。それでも、若くして仁和寺香隆寺の守誉大僧正のもとに入門、師の寵愛を受けた愛弟子であつたこと、歌僧であつた守誉の感化もあつてか、早くから和歌に親しみ、また為世の門人ともなつて目をかけられたこと、ただ二条家の歌会や公的な歌合などには積極的に参加することはなく、数寄心のおもむくままに詠歌していたこと、やがて崇敬する守誉の死に直面、大きな衝撃を受け、その後、筑紫歌壇の武人からの招請があつたことか、九州に下向、再び京洛に帰ることもなく、南北朝動乱の時代に客死したであろうことなどを、推測をまじえながら、素描できたかと思ふ。

また、彼の現存する和歌は、あまりにも稀少だが、その範囲を瞥見してみても、やはり為世門の二条派歌人の典型的な歌風であつたこと

が察知できたといえよう。

\* \* \* \*

〔現存する能誉和歌集成〕

(勅撰集)

(題しらず)

わび人の心にならへほととぎすうきにぞやすくねはなかけける

(新後撰集・雑上・二二七二)

(題しらず)

恋ひしなむ後にもかたる人もがなおなじ世にこそ忍びはつとも

(統千載集・恋一・二二一八)

(題しらず)

あくがるる心のままに尋ねきて山ちのはてを花にみるかな

(統千載集・雑上・一六七二)

(題しらず)

思ひ出でて忍ぶならひのなかりせば何かむかしの名残ならまし

(統後拾遺集・雑下・二二五九)

前大僧正守誓身まかりて後よめる

草の陰なほこそたのめ露の身の置き所なくなるにつけても

(統後拾遺集・哀傷・二二四九)

(題しらず)

もろくちる木の葉ながらや過ぎぬらん枝にとまらぬ風のおとかな

(新千載集・冬・六三〇)

(恋の歌の中に)

年月のつらさは夢になしはててこよひをながきうつつもがな

(新千載集・恋三・一三九三)

(臨永集・恋中・四七五)

逢不会恋の心を

涙川たえぬ思ひのふちはあれど逢瀬ばかりのなどかはるらん

(新千載集・恋五・一六一七)

(題しらず)

たのめてもこぬみの涙のおきつ風なにいほさきの松に吹くらん

(新拾遺集・恋三・二一六五)

逢恋をよめる

ならはねば身にこそ夢とたどるともこれはうつつといふ人もがな

(新後拾遺集・恋三・二二二四)

(私撰集)

水上落花といふことを

いけ水はかつちる花にうづもれてのこるさくらのかげもうつらず

(統現葉集・春下・二二二)

薄をよめる

うちなびくいりえの尾ばなかけみえて袖に浪こすまののうらかせ

(統現葉集・秋上・二二五九)

(紅葉をよめる)

しぐるともいはでの山の下もみぢそめてぞ秋の色はみえける

(統現葉集・秋下・三三九六)

前大僧正守誓身まかりにける比、人のとぶらひ侍りければよめる

夢とのみなほもうたがふわかれちをうつつに人のとふぞかなしき

(統現葉集・哀傷・六六四)

秋の歌の中に

風わたるのもせになびくはなすすきおなじ心にたれまねくらん

(臨永集・秋・一六一)

(恋の歌の中に)

人しれぬみやまがくれのむもれ水したに心のゆくかたもなし

(臨永集・恋上・三六七)

(題しらず)

偽のあるをならひとたのみてややすくも人のちぎりおきけん

(臨永集・恋中・四四六)

(題しらず)

ふみわけしをかのかげ草かれがれにかよひたえたる水ぐきのあと

(臨永集・恋下・五二五)

霧旅歌とよめる

都人かよふゆめちやたどるらんよなよなかはるくさのまくらに

(臨永集・雑下・七一五)

(冬の歌の中に)

おちたぎつはやせにうかぶ水鳥の身さへながるとねをや鳴くらん

(松花集・冬・一〇八)

(その他)

あふ坂やつひにとまらぬ月かげを関のとあけてにしに見る哉 (井蛙抄)

さとの犬の声するかたをしるべにてとがむる人にやどやからまし (井蛙抄)

注1 『佛教大辞典』(小学館)、『日本佛教語辞典』(平凡社)など参照。

2 日本古典文学大系による。

3 古典文庫『古事談上』による。

4 岩波文庫『連歌論集上』による。

5 『日本古典文学大辞典』の「和歌四天王」の項目参照。

6 日本古典文学大系『歌論集 能楽論集』所収本による。

7 伊地知鉄男編著『今川了俊歌学書と研究』(未刊国文資料)による。

8 『中世歌壇史の研究 南北朝期』以下、井上氏の意見は同書による。

9 『国文学 言語と文芸』第一〇〇号、昭和61年12月。

10 群書類従巻五十九。

11 『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編』による。以下、勅撰集は同書による。

12 『新編国歌大観 第六巻 私撰集編II』による。以下、引用の私撰集は同書による。

13 拙稿「藝花園の風流——頼阿とその子孫の居宅をめぐって——」、岡山大学教育学部研究集録、第七十九号、昭和63年11月。

14 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 南北朝期』にみえる意見。

15 『中世文芸の地方史』。

16 注15にみえる意見。

17 「小師」というのは、他人に対して、へりくだって自分の師をいう語、または、沙門が自分をへりくだってという語であるが、ここは前者で、「あたかも自分達の直接の師のように」の意か。

18 未刊国文資料に翻刻がある。

19 『新編国歌大観 第四巻 私家集編II・定数歌編』による。以下、定数歌は同書による。

20 日本古典文学大系による。

21 『新編国歌大観 第四巻 私家集編II・定数歌編』による。以下、私家集は、同書か同書の「私家集編I」による。

22 『日本歌学大系 第四巻』による。

23 日本古典文学大系による。(平成元年四月十四日受理)